

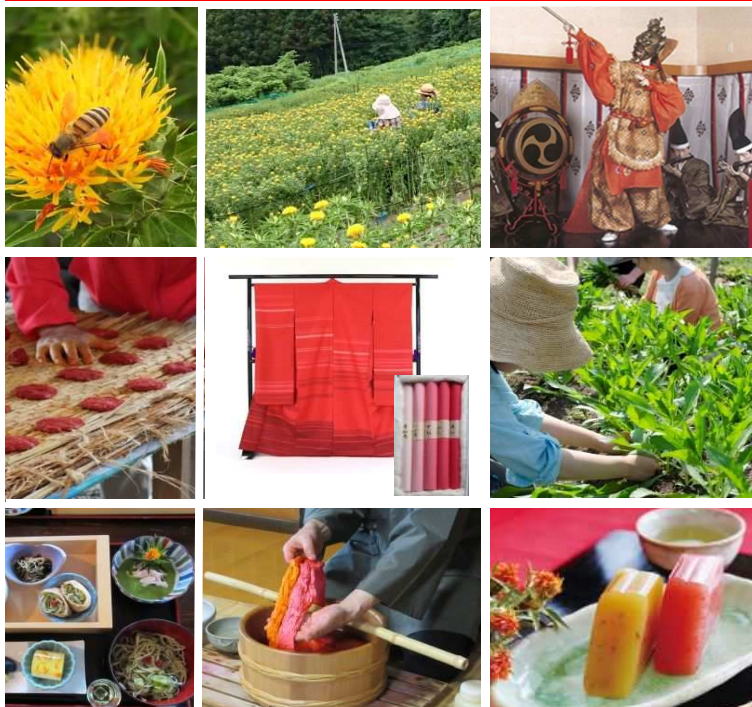
日本農業遺産

*Japanese Nationally Important
Agricultural Heritage Systems*

歴史と伝統がつなぐ

山形の 最上紅花

～日本で唯一、世界でも稀有な
紅花生産・染色用加工システム～



山形県紅花振興協議会

最上川流域

山形市、米沢市、酒田市、天童市
山辺町、中山町、河北町、白鷹町

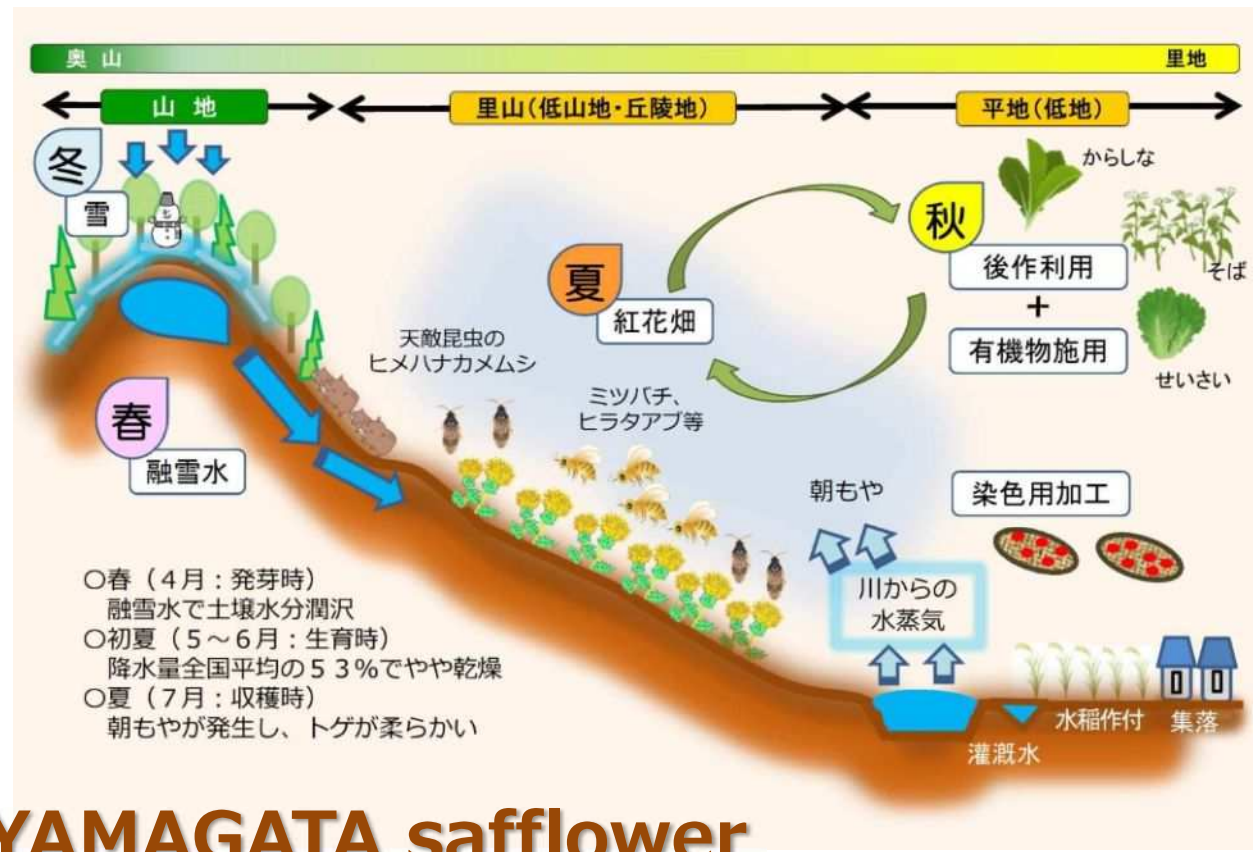
事務局：山形県農林水産部園芸大国推進課

TEL：023-630-2458

地域の自然を生かした 紅花生産

紅花は、中山間地域の主に川に近い場所で栽培されています。農業者は、春の雪解け水や夏の収穫時期の川からの朝もやなどの自然環境を生かし、播種、花びらの摘み取りから紅餅加工、検品・出荷まですべて自らがを行っています。

紅花は、連作すると収量が低下することが古くから知られており、地域在来のそば、野菜などを組み合わせた輪作により、連作障害を防いでいます。さらに、紅花の作業と競合しない水稻等との組合せにより、農業所得の確保に努めています。



YAMAGATA safflower

日本で唯一、世界でも稀有な

紅花生産・染色用加工システム

最上川流域の肥沃な土壌と朝霧の出る気象条件を活用し、輪作と有機物の施用で栽培される「もがみべにばな」と染色用素材「紅餅」への加工技術が一体となった世界的にも稀有な農業システム。室町末期以来450年の伝統を有する6次産業化の先駆的システム

古来から伝わる 紅餅加工技術

紅花の花びらを染色用の紅餅に加工する技術は、江戸時代から伝わる伝統的な技法です。

摘み取った花びらは荒振り、中振り、花ねせ、餅つき、餅つくり、乾燥の工程を経て、紅餅になります。紅餅1枚をつくるのに約300輪の花びらが必要です。

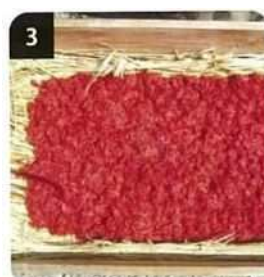
この技法は「最上流」と呼ばれ、花ねせで花びらの色素を酸化させ、しっかりとした紅色を確保するのが特長です。日本の伝統文化を彩る「あか」の染料を現代まで継承し、残してきたのは当地域だけです。



≪荒振り≫
きれいな水で洗浄する



≪中振り≫
花びらに水分を含ませる



≪花ねせ≫
むしりに広げ、ねかせる



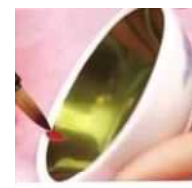
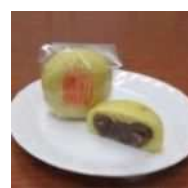
≪餅つき≫
臼でついて餅状にする



≪餅つくり≫
丸べて並べ、薄くつぶす



≪乾燥≫
裏返ししながら乾かして完成



紅花に育まれた伝統文化

紅餅は、江戸時代には最上川舟運で酒田に集められ、北前船で京都に運び、天皇や貴族などの衣装、伊勢神宮の伝統的な装束などの紅色として使われ、日本の伝統文化の成立に大きく貢献しました。県内では、伝統的な織物である米沢織や観賞用の切り花、様々な食品など、各産業で活用されてきました。昭和57年には県の花に認定され、広く県民に親しまれています。

8月に山形の最大のお祭りである花笠まつりが開催されます。使われる花笠は紅餅を乾燥する丸いむしろを笠に見立てたものです。

紅花がなければ伝統文化は生まれず、伝統文化がなければ紅花の農業システムはここまで残らなかったといえます。

紅花生産から生まれたランドスケープ

当地域では、水利が良く平坦な場所では水稻をつくり、水が不便なため水稻がつかれない中山間地では紅花をつくり、荒廃しがちな中山間地の農地の保全に努めてきました。

紅花生産という人の営みと自然環境との深い関わりが、この地域独自の里地・里山を形成してきました。



紅花を支える 多様な生物群

紅花栽培は、多様な生物に支えられています。有機物を施用し、薬剤をほとんど使用しない、持続性の高い農業を行っているため、紅花畑には多様な昆虫が生息しています。

訪花昆虫は紅花の種子量を増やし、天敵昆虫は花の品質を向上させます。さらに、紅花はミツバチなどの訪花昆虫にとって、咲く花が少ない7月の貴重な蜜源となっています。



世界的に重要な当地域の紅花生産・染色用加工システム

- 人間が紅花を染料として使用してきた歴史は古く、紀元前 2,500 年のエジプトのミイラを包んだ布が、紅花で染められていました。その後、原産地のイスラエル付近から、シルクロードを西から東にわたる間に、それぞれの地域で紅花を用いて「あか」に染める文化が広まりました。
- 日本では、3 世紀前半の纏向(まきむく)遺跡の溝跡で、大量の紅花の花粉が見つかったことから、すでにそのころから、染色が行われていたとされています。日本では「あか」は特別な色とされ、全国各地で紅花が生産され、京都に運ばれて、染料や口紅の原料として、日本文化を支えました。
- 山形では、約 450 年前の室町後期には栽培され、栽培に適した気候と高度な加工技術により、江戸時代には「日本一」の産地と呼ばれるようになりました。明治時代中期以降、化学染料の台頭等により、需要が激減し、日本では山形でしか生産されなくなりました。現在、紅花は、世界的にはサフラワーオイルをとるための生産が主で、「あか」の染料として使われることはほとんどありません。
- この紅花生産・染色用加工システムがなくなれば、紅花から赤色素を効率よく取り出す技術が世界からなくなることになります。このシステムは、全世界の紅花を用いた染色についての知識体系の最後の砦です。



最上川流域に広がる紅花畑



お問い合わせ先

山形県紅花振興協議会（事務局：山形県農林水産部園芸大国推進課内）
〒990-8570 山形県山形市松波二丁目 8 番 1 号
TEL 023-630-2458 FAX 023-630-2456